

P-95 絨毛膜羊膜炎(CAM)における臍帯血中の α -1 AG, Hp, CRPの迅速測定による動態と新生児のAPRスコアに及ぼす影響

名古屋市立城北病院

小池皓式, 平田 修, 水野昌彦
三輪美佐, 丹羽咲江

〔目的〕新生児期における感染症の判断には α -1 acid glycoprotein(α -1 AG), Haptoglobin(Hp), C reactive protein(CRP)(APR)測定が有効である。臍帯血中のAPRを測定し児の予後に大きく影響する絨毛膜羊膜炎との相関関係並びに新生児の予後についての有用性を検討した。

〔方法〕平成5年~9年3月までの早期産を中心とした分娩750例に臍帯血のAPR並びに胎盤の組織はBlancの分類にて検討。臨床的に新生児に異常があればNICUに収容し敗血症等の検討をした。

〔成績〕1)750例中CAM陽性は268例(35.7%)その内、臍帯血のAPR陽性68例(CAM陽性の25.4%)CAM陰性482例中5例にAPRの上昇を認めた、即ち、臍帯血のAPR上昇のCAMにたいする敏感性は25.4%と低いが、特異性は99%と高い、CAMがあっても臍帯血のAPRの上昇を示すものは少ないが、臍帯血にAPRの上昇が見られた場合はその主要因はCAMであることが判明した、2)臍帯血のAPRの上昇の大部分は抗生剤を使用しなくても、生後7日までに正常化した、臍帯血のAPRの上昇の大部分はCAMによって誘導された非感染性の一過性の上昇と考えられた、3)この間に早発型敗血症は3例に認められたが、いずれもCAMを伴いCAM陽性例の1.1%に相当、4)CAM陽性のうち72%にPROMを認めた、

〔結論〕1)早期産を主とした症例の35.7%にCAM所見を認めた、2)CAM陽性例のうち25.4%に臍帯血のAPRの上昇を認めた。3)臍帯血のAPRの上昇の大部分はCAMによって誘導された非感染性の一過性の上昇と考えられた、4)早発型敗血症はCAM症例の1.1%に認められた、

P-96 不妊症患者におけるFitz-Hugh-Curtis症候群(FHCS)の病態に関する検討

順天堂大

中野義宏, 武内裕之, 佐藤雄一, 地主真理,
豊成由佳, 淡路正則, 斎藤十一, 三橋直樹,
桑原慶紀

〔目的〕不妊症に占める卵管障害の頻度は高く、その原因としてChlamydia trachomatis(CT)感染の重要性が報告されている。卵管障害を示す疾患のうちFHCSは、骨盤腹膜炎が上腹部に波及し、特有の肝周囲癒着を合併する疾患である。今回、不妊症患者の腹腔鏡施行時に発見された31例のFHCSについてその病態およびCT感染との関連について検討した。〔方法〕腹腔鏡を施行した不妊症患者239例中FHCSと診断された31例を対象とした。子宮頸管のCT抗原(IDEIA法)、血中CT抗体(セロイパライザ法)および腹腔鏡下に腹腔内のCT抗原をPCR法で検索し、肝周囲癒着、卵管周囲癒着の程度および卵管疎通性を評価し、それらの関連性について検討した。〔結果〕子宮頸管におけるCT抗原は7/31例(22.6%)で陽性、腹腔内からのCT抗原は3/22例(13.6%)の検出率であった。一方、血中CT抗体ではIgA陽性が27/31例(87.1%)、IgG陽性が100%であった。肝周囲癒着は数本のみの軽度のものからカーテン様の顕著なものまで様々であり、左葉よりも右葉に高頻度にみられた。しかし肝周囲癒着の程度と血中CT抗体価との間には有意な相関は認められなかった。卵管の癒着スコア(r-AFSスコア)は 9.0 ± 7.3 であり、卵管水腫は30/61卵管(49.2%)でいずれも左側に強い傾向が認められた。卵管疎通性は16/61卵管(26.2%)で確認された。しかし、卵管周囲癒着の重症度と血中CT抗体価との間には、有意な相関は認められなかった。〔結論〕FHCSではCT抗原の陽性率は必ずしも高くはないが、抗体の陽性率は高くCT感染との関連が強く示唆された。しかし、癒着の重症度と抗体価には相関がなく、確実な診断および治療には腹腔鏡検査が不可欠であると考えられた。